

## 論文内容要旨

### 論文題名

Predictors of resignation and sick leave after cancer diagnosis among Japanese breast cancer survivors: a cross-sectional study.

(日本人乳がん患者における癌診断後の離職および病休取得の予測因子の検討：横断研究)

### 掲載雑誌名

BMC Public Health Vol.21, 2021年 掲載予定

医学研究科社会医学系衛生学公衆衛生学専攻 特別研究生 三井 清美

### 内容要旨

がん治療と就労の両立支援は重要な課題になっている。本研究の目的は、本邦における乳がん患者の離職と病休取得に関する予測因子を明らかにすることである。

診断後1年以上経過した18～69歳の女性を対象にWebベースの調査を2018年1月に実施した。515名の乳がん患者のうち、データに欠損がある者など246名を除外し、269名を離職の予測因子の対象者とした。次に退職した40人を除外した229名を病休の予測因子の対象者とした。それぞれ多変量ロジスティック回帰分析を用いて分析した。

269人中40人(14.9%)が乳がんと診断後少なくとも1年経過後に離職した。多変量ロジスティック回帰分析の結果、離職の予測因子は、学歴が低いこと(odds ratio [OR]: 3.802; 95% confidence interval [CI]: 1.233-11.72)、病休取得(OR: 2.514; 95%CI: 1.202-5.261)、そして年齢が若いこと(OR: 0.470; 95%CI: 0.221-0.998)であった。就労継続229人中病休取得した人は72(31.4%)人で、病休取得の予測因子は手術を受けたこと(OR: 8.311; 95%CI: 1.007-68.62)であった。

欧米では、学歴が低い人の方が高い人より復職までの期間が長く、離職しやすいこと、長い病休は離職と関連していること、また若い人の方が、年齢が高い人より、より強い治療を受けることが報告されている。本邦における結果は先行研究を支持する結果となった。また、乳がん治療のための手術を受けた半数以上の人が病休を取得したことが示されていることから手術は病休の予測因子となると思われる。